

安倍能成と朝鮮

中見 真理

Paper Abstract: Abe Yoshishige's Views on Korea

Abe Yoshishige (1883-1966) who is generally known as one of the liberal philosophers in modern Japan, had resided in Korea as a Professor at Keijo Imperial University for nearly 15 years [from 1926 to 1940]. At that time, Korea, as a colony under Japanese control, was oppressed by Japan. His views on Korea have been examined by several researchers until now. However there is a noticeable disagreement among their argument about the characterization of his attitude toward Korea. In this article, I will firstly correlate his views on Korea with his outlook of the world beyond concerning Korea, for such a perspective has been neglected by previous studies on Abe. That is to say, I will clarify his interpretation of the relationship between individual and society, his fundamental views on international relations, his observation of the present state of Japanese culture, his views on colonialism and Japanese colonial policy, in relation to his views on Korea. Then I would like to characterize his attitude toward Korea, again. In my opinion, Abe was a genuine colonialist and his superficial favorable posture to Korea was nothing but an expedient to facilitate Japanese colonial rule of Korea.

はじめに

安倍能成（1883～1966）は、戦後日本におけるオールド・リベラルの代表的思想家のひとりであり、優れた人格者・教育者として知られている。1940年から第一高等学校校長をつとめた際には、名校長として高い評価を得た。1946年1月、幣原喜重郎内閣下の文部大臣となり、同年3月には米国教育使節団を迎えて活躍した。文部大臣を辞して後の46年8月には帝室博物館館長就任、同年10月から約20年間は学習院院長の職にあった。一高在学時以来、岩波茂雄と親交を結んでいたことから岩波書店の最高顧問となり、雑誌『心』や『世界』の創刊に深く関与し、『世界』を舞台に展開された平和問題談話会の一員として平和運動にもかかわった。

安倍にはもうひとつ注目すべき側面がある。それは戦前、京城帝国大学教授（西洋哲学）としてかなりの長期間朝鮮に滞在していたということである。その結果彼は、朝鮮に関する随筆集『青丘雑記』『権域抄』や、朝鮮に言及した多くの文章（『静夜集』『草野集』『朝暮抄』等に収録）を残している。

朝鮮時代の安倍については、これまでいくつかの論文が書かれてきたが、その評価はいまなお一致をみていない。朝鮮の自然の美しさを描写しそれを生かし続けるべきだとする安倍の文章に、朝鮮文化への高い評価と日本の政策批判を読み取り、彼の姿勢をヒューマ

ニズムに基づいたものとして賛美し好意的に受けとめている研究者（芳賀、梁、高柳）が、一方にはみられる。他方、政治問題に関して傍観者的だった点を取り上げ批判する研究者もいる（梶井、榛葉、崔）。さらに独立の問題を視野に入れずに日本人と朝鮮人の信頼関係が得られるとみていた点に着目し、安倍の「教養」は、他民族に対する侵略への感受性の弱さによって性格づけられると指摘した研究（五十嵐）や、直接安倍を扱ってはいないが、安倍が「内鮮融和」の観点を持っていたと指摘する研究（高崎）もある⁽¹⁾。

しかし既存の研究はいずれも、安倍が朝鮮について直接述べた文献だけを取り上げて、彼の朝鮮観を論じており、それが彼の思想全体のなかでどのような位置を占めていたのかを考察していない。そこで本稿では、安倍が朝鮮以外について論じた文章をも取り上げ、安倍の世界観がいかなるものであったかを可能な限り明らかにし、その中に改めて彼の朝鮮観を位置づけてみたい⁽²⁾。安倍はそもそも個人と社会の関係をどうあるべきと考え、そのことが朝鮮観にどう反映していたのだろうか。国際関係については基本的にどうみており、それが欧米・日本・中国・朝鮮の関係をいかに規定したのだろうか。また日本の植民地支配に対する考え方はどのようなものであったか。本稿はこれらを解明しつつ、彼の朝鮮観の性格を改めて浮き彫りにしようとするものである。

まず、安倍が朝鮮でどのような生活を送り、朝鮮をどう観察していたのかについて簡単に述べておきたい。

1. 朝鮮での生活と観察

安倍は1924年、官命により⁽³⁾1年4ヵ月間ヨーロッパに留学の後、1926年に新設された京城帝国大学の教授として朝鮮にわたった。1940年に一高校長として「内地」に戻るまでの15年間、同帝大教授として朝鮮に滞在した。28年から2年間は、法文学部長をつとめている。その間、家族は東京に残したまま、年に三回、京城と東京の間を往復していた。妻は、安倍の赴任した1926年に一度、朝鮮へ行ったが、家族がそろって朝鮮を訪問したのは、1938年が初めてであった。そのとき子供たちはすでに長男が25歳、次男22歳、長女は20歳になっていた⁽⁴⁾。

朝鮮に居住していた安倍は、朝鮮人との間に家庭的交流をほとんど持たず、朝鮮人の風俗と接するのは、「街頭触目の小天地のみ」であると自ら述べていた⁽⁵⁾。戦前に書かれた彼の文章のなかで具体的に述べられている朝鮮人はごく少数で、個人としての朝鮮人学生は取り上げられていない⁽⁶⁾。東京の東洋大学に学んだ李午性という骨董屋の主人と、「内地人」のように「国語」を話すその妻、学校に毎日のように出入りして古本や書画骨董の類を売っていた「朴某」という男についての記述⁽⁷⁾の他には、電車のなかで見かけた朝鮮人への言及がみられる程度である。

「内地」に戻って5年後の1945年、朝鮮情勢を心配しつつ、無事を願うのは、京城帝大の二三の尊敬し親愛する友人と、工芸会の善良なる人々およびその家族のことであると述べており、そこには朝鮮人は含まれていなかった⁽⁸⁾。安倍が朝鮮人のなかに尊敬することの出来る人物を見出した形跡はみられない。これらのことは、朝鮮滞在中の、安倍の朝鮮人とのかかわりがきわめて希薄だったことを示している。朝鮮人の長所や、良風美俗を探そうとする観点が全くみられなかったわけではない⁽⁹⁾が、そのようなものを十分に見出すまでには、朝鮮人のなかに入り込んでいなかったのである。

では安倍は朝鮮をどう観察していたのだろうか。

しばしば指摘されているように、安倍には、朝鮮の自然や建物の美しさに言及した文章が多い⁽¹⁰⁾。例えば、石造の廃墟や屋根瓦の美しさの描写、朝鮮人が画面的景観のつくりや石造の建築において優れていること、アテネとの共通点を挙げながら京城を称えていること等々である⁽¹¹⁾。また1939年には、南大門を「偉大な門」と呼び、その美観を称賛しながら、これを破壊するならば都市美化の企ては無意味に帰するとも述べていた⁽¹²⁾。海印寺の八万大蔵経板庫の素晴らしさや、平壤牡丹台付近の建築物と自然の調和を高く評価し、それらは内地ではほとんど見るできないとも記していた⁽¹³⁾。

安倍が賛美していたのは、自然や建物だけではなかった。女性や子供の服装を内地のものよりも高く評価していた⁽¹⁴⁾。とくに女性の服装については、清楚という点で世界にあまり類を見ない⁽¹⁵⁾と表現していた。朝鮮の紙も称え、食物に関しても学ぶ点があると述べていた⁽¹⁶⁾。

これまで安倍の朝鮮観を優れたものとして高く評価する論者は、主に以上のような文章に眼をとめてきたのである。

しかしこれらの文章を書きながら、安倍は他方で、朝鮮の自然も文化もそれ自身としては優れたものではない⁽¹⁷⁾とも述べていた。朝鮮の社会を全体として学問文化が尊重されず、眼前の事功にのみ人々の関心が寄せられる社会であるとし、「強い者に媚び、弱い者に威張る、虎の威を借る狐といふ風」が、特に著しく、官権の保護なしには何事も成しえず、民間に正しく強い世論がみられないところであると総括していた⁽¹⁸⁾。安倍には、「不毛な朝鮮史」という表現や、朝鮮文化を「粗製濫造」と性格づける観点もあった⁽¹⁹⁾。

では以上のような観察は、安倍のいかなる世界観から生まれたものだったのだろうか。次には安倍が「個人と社会」について基本的にどう考えていたかを考察することとした。

2. 「個人対社会」観

先ず安倍には、個人が内面的な充実をはかることを、社会的事業にかかわるよりも重視する傾向がみられた⁽²⁰⁾。自分の個性的要求に忠実に生きるべきであり、社会に関わることによって、自己に無理を強いて暗い気持ちでつまらぬ人生を過ごす必要はないとする考えがあった⁽²¹⁾。他人を意識せずに自己に徹し、真や美を重んじつつ、「心の自由」を求めて行くような人間を好ましいとしていたのである⁽²²⁾。しかも快活に生活を楽しみながら、例えば福沢諭吉や白樺派同人のように楽観的で明るく前向きに生きる人々に高い評価を与えていた⁽²³⁾。

これは安倍自身が「動もすればペシミスティックになる」⁽²⁴⁾ 傾向を持ち、それを克服したいとしていた結果だったと考えられる。その背景には、一高時代の級友藤村操が日光華厳の滝に身を投じて自殺したことに強い衝撃を受け、煩悶状態に陥った経験があった⁽²⁵⁾。

安倍の理想の人間像には、スピノザの思想や東京帝国大学で哲学を講じていたドイツ系ロシア人ケーベル (Raphael Koeber 1848~1923) から学んだものが反映していた。ちなみに東京帝大で哲学を専攻した安倍が卒業論文で取り上げたのは、スピノザであった (卒業論文論題は「スピノザの本体論と解脱論」)。安倍によれば、スピノザは、隠遁の生活をしていたにもかかわらず、世をすねることなく、人間に積極的な興味を持っていた。自己否定につながる卑下や後悔を批判的にとらえ、身体と精神の活動力の正比例を説いて強い肉体を肯定した快樂主義者、幸福主義者、功利主義者でもあった⁽²⁶⁾。

一方、安倍が東京帝大哲学科時代に最も慕っていた教師の一人ケーベルからは、自己の自然を歪めぬこと、真と美を慕う心や「心の自由」の大切さを教えられていた。安倍のみたケーベルは、アポロ的なものの愛好者であると同時に、一隅の幸福を楽しむような人物であった。無理をして多くを望んで偽善に陥るよりも、静かに自己の領分を守り、自己の生活を充実させることが、神の意志にかなうと考えていた。そして社会国家のことは必然な成り行きに任せるという姿勢を持っていた⁽²⁷⁾。安倍は、このようなケーベルに、「最も精練された個人主義者」をみていた⁽²⁸⁾ のであった。

この結果安倍は、自己のあり方を熟慮・充実させることなく、社会改革に向うことには否定的だった。

もちろん社会組織改善の勇気を失ってはならないと述べていたことにも示されるように⁽²⁹⁾、社会の改善を全く考えていなかったわけではない。しかし個人的自覚があっただけで真の社会的組織が成り立ち、その上で社会の改革もありえるとし、個人が確固としたものにならなければ社会全体は堅固にはならないと考えていたのである⁽³⁰⁾。安倍には、人類のあるいは国民的といった理想も、先ず個人を踏まえなければ空疎なものに

なってしまうとする受けとめ方があった⁽³¹⁾。

しかし安倍にとって、個人の充実とは、決して国家や人類と必然的に衝突を招くものではなかった⁽³²⁾。スピノザが、人間は孤独においてよりも国家のなかにおいて一層自由であるとみていたのに共鳴しつつ⁽³³⁾、基本的には所属する国家に肯定的であり、国家に適応的な姿勢を望ましいと考えていた。

このような安倍が、左翼思想を好意的に受けとめていなかったのは当然であった。マルクス主義流行の原因については、日常の個々の事実に強い統一的原理を与えることが出来たために、とくに青年たちに受け入れられたのだと指摘し、それによって哲学学徒たちが、個人主義的自足に安んじることが出来なくなっている点を問題視していた⁽³⁴⁾。また関東大震災に際して、「空威張りの所謂プロレタリアート論客」が影を潜めたことに対しては何らの不愉快も感じないと述べていた⁽³⁵⁾。ロシアにおける過激派の運動についても、「デモクラシーの真精神」を持つものとは考えられないとし、革命によって誕生したソビエト連邦が、民族や人種を超えて力を持つことは「不可能事」とであると予測していた⁽³⁶⁾。

階級問題についての解決法は、すでにケーベルによって示唆されていた。安倍は、ケーベルの「僕婢」に対する態度をほとんど理想的だと述べ、それが輕易にプロレタリアートの友であると口にする青年などの一朝にして達し得るところではないと記していた。ケーベルの姿勢は、「日本人を一段下等な人種と見下して居る西洋人の日本人に対する態度としては稀有」であり、人種、言語の違いや学識教養等の距離にもかかわらず、人間として日本人と「常に同等のレベルに立つ」ことを忘れなかったとほめ称えていた⁽³⁷⁾。

安倍は、自らを親分・子分の関係を持つとしない人間であると述べ、努力することなく自然にできることは、どんなに賤しい身分の人をも軽蔑しないことだと自負していた⁽³⁸⁾。結局安倍には、階級闘争を社会問題として正面から重視して行く姿勢はみられなかった。それは個々人の努力や、民衆の心を重んじ富の配分の不公正を正す政治家の出現によって解決可能であると受けとめられていたのであった⁽³⁹⁾。それゆえ1936年に書かれた文章においても、国家社会のなかで「誤ることなく中道を闊歩して行く」ことを好ましいと表現していた⁽⁴⁰⁾。

安倍にとって、これからの理想社会は、デモクラシーの精神を採用し、民衆の生活と密接な関係を持ち、民衆の生活を代表する国家を基盤としたものであった⁽⁴¹⁾。今後は民衆を重んじる政治家が求められるとも説いていた⁽⁴²⁾。そしてこの場合のデモクラシーとは、民衆のための政治ということのみならず、政治における民衆の自力を認めた民衆自身のなす政治という意味をも持つ⁽⁴³⁾と述べていた。このことは、民衆にもまた個人としての力が求められることを意味したであろう。

以上に考察したように、安倍は、先ず個人が充実することを重視し、それが基盤となつてはじめて社会が理想に近づくとみていたのである。

ではこのような考え方は、彼の朝鮮観にどう反映していただろうか。次にはこの点から朝鮮が、中国・台湾・日本との対比においてどう位置づけられていたのかを明らかにしたい。

3. 個人・民衆の力という観点からみた朝鮮の位置

安倍は、朝鮮の人々について、生活力が萎縮しており、とくに民衆の力が乏しいという印象を頻繁に記していた⁽⁴⁴⁾。その原因のひとつは、早婚に求められるとし、それは個人の生命を尊重せず蹂躪・枯渇させる家族主義の弊害のあらわれだと指摘していた⁽⁴⁵⁾。さらに民衆の力が乏しいのは、「李朝時代」の平民が無力で、組織的な民衆的娯楽を持たなかったことが、「現代」にまで及んでいるためだともみていた。そしてそれを徳川時代の日本の民衆に活力があり、平民的音楽や演劇が栄えたことと対比的に受けとめていた⁽⁴⁶⁾。

また朝鮮人が集まったときに示される服装の統一性にも、安倍は、民衆の力の貧弱さを読み取っていた。それは内地人の服装がみすぼらしく、統一が欠如しているのと対照的だったが、安倍によれば、内地人は、自分の好みを自由に発揮したいとする要求とそれを可能にする経済力を持っていたのに対し、朝鮮人は、個人の自由意思や経済力が乏しかったのである⁽⁴⁷⁾。

一方安倍は、中国の民衆には、高い評価を与えていた。1928年に初めて中国を訪れた際に、民衆の生活力に驚き、中国は動いているという印象を持った。中国の民衆は、その力を自覚していないにもかかわらず強く、生活力が旺盛である、それは勤労力の強大と享楽力の強さによるものであり、個人としての強さのあらわれであり、そこに朝鮮人との違いがみられると述べていた⁽⁴⁸⁾。

さらに日本植民地下の台湾でも、人々には生命力や生活力が強く、経済的豊かさゆえに民衆の力も優っており、それが都市や建物や民衆の信仰にあらわれていると観察していた。それは「民衆の力の乏しい朝鮮にはみられない」ものであった。「朝鮮の農家の灰色」と対比しつつ、台湾の「賑やかな色彩」にも感嘆していた⁽⁴⁹⁾。安倍には、民衆の力の差を社会にみられる色彩の多寡と結びつける観点もあった。朝鮮の「無知」な民衆をいまなお動かしているのは、原始的信仰であり、それは服装に原始的信仰の色である白色が優越していることにもあらわれている、そこには人の心を暖かくし、豊かにする色彩が欠乏しているとも述べていた⁽⁵⁰⁾。

このように安倍には、個人の生命力・生活力、とくに民衆の力という観点から、朝鮮を日本・中国・台湾よりも下位に位置づける見方があった⁽⁵¹⁾。

また安倍は、歴史とは、全体に対する個人的意識の反抗から生じるものであり、民族がある風土や地勢の下で、特定の風俗習慣を持っているだけでは、あまり意味をなさないとい

みていた⁽⁵²⁾。民族的生活が生活原理としての力を持つためには、その国に歴史や文化がなければならない、そのためには、文化を創り歴史を生もうとする精神が働いていなければならない。こう述べて安倍は、南洋の島々の「土人」や、アイヌには独自の文化を認めていなかった⁽⁵³⁾。このことから判断するならば、安倍にとって戦前の朝鮮は、日本、中国、台湾よりも、南洋の人々やアイヌに近い存在として受けとめられていたのではないだろうか。個人の生命の尊重や個人的自由意思を欠き、民衆の力も弱い朝鮮には、文化が成り立つための必要条件が整っていないと判断されていたと思われる。安倍が朝鮮の文化を基本的に優れたものと見ることが出来ず、朝鮮の歴史についても「不毛」と表現したのはこの結果だったであろう。

では次に安倍は、国際関係については基本的にどうみていたのだろうか。

4. 基本的な国際関係観

第一には、国際関係を主に利害によって動き⁽⁵⁴⁾、たえず変転するものとみていた。それゆえ特定の国を道徳的に全く正しいとするような見方はとっていなかった。1930年代の英仏とドイツとの関係についても、どちらが道徳的に高いとは言えない、それぞれが自国を人道的で相手国を侵略的だと宣伝しているにすぎないと述べていた⁽⁵⁵⁾。したがってむやみにある国を頼ったり軽んじたりすることは好ましくないとし、日本の進むべき道についても、真の利害と照らし合わせ冷静に考えつつ、善処してゆかねばならないと説いていた⁽⁵⁶⁾。

第二に、基本的に国際社会は、今なお国家のような「強固な具体的な」全体を形成するにはいたっていないとみていた⁽⁵⁷⁾。安倍は有効な社会には支配の中心となるものが必要だと考えていたが⁽⁵⁸⁾、国際社会にはまだそのようなひとつのまとまりが得られていないと認識していた。したがって第一次世界大戦後に誕生した国際連盟についても、各国の利害の衝突が障害になるだろうと予測していた⁽⁵⁹⁾。しかし他方、国際関係に道徳の働く余地が全くないとみていたわけではない。現状維持勢力も現状破壊勢力もともに国際的正義の名において、自分たちの行動を正当化しようとしていることは、国際政治にも道徳的であるべきだという規範が働いていることを意味すると述べていた⁽⁶⁰⁾。ウィルソン主義についても、国際関係を人道主義的方向に一步進めたものとして一定の評価を与えていた⁽⁶¹⁾。

第三に、民族主義や国家主義の勃興には肯定的だった。安倍は、30年代に強い民族主義や国家主義が起ってきた原因として次の三点を指摘している。第一には世界が狭くなって国家間関係が非常に密接になってきた結果であった⁽⁶²⁾。第二にそれは、世界における「既成勢力」と「未成勢力」の対抗の必然的産物であった⁽⁶³⁾。第三には、社会主義が国家を分裂させようとする動きへの対抗でもあった⁽⁶⁴⁾。安倍は、国境を横断する階級の結

合と、民族的結合の力を比べた場合には、後者の方が、共通の自然的条件や社会的、歴史的条件のもとに形成されてきたためにより強いとみていた⁽⁶⁵⁾。また民族と国家の関係については、両者が一致すれば理想だが、必ずしもそうなるとは限らないととらえ、国家間の複雑な利害闘争の力の方が、民族的統合を促す力よりも強いと認識していた。従って国際関係は単純に民族的結合を目指して動いているわけではないのであった⁽⁶⁶⁾。このように安倍にとっては、国家主義が、民族主義や社会主義よりも強力なものとしてとらえられていた。

第四に、民族主義には共感を寄せていたが、あらゆる民族の自決を好ましいとしていたわけではなかった。とくに小規模の民族の自決については、不自然なものとしていた。そのことは、1920年代にヨーロッパを旅した際、ノルウェーにデンマークとの言語上の差異を強化して行こうという民族的機運が高まっているのを見聞しながら、それをウィルソン米大統領が、第一次大戦後のヨーロッパに、民族自決を「無理押しに不自然に課した」結果だと述べていた⁽⁶⁷⁾ ことにも示される。

これは小国が大国の動きから超然として存在することはもはや無理だと、安倍がみていたこととも関連づけられる。彼は、小国に徹し、国家間のいざこざに介入しないでいるのは理想的だが、現状では虫が良すぎる考えであると認識していた。常に他国の戦いの外に超然とすることによって、利益や幸福を享受することが、神の公正によって許されぬことは、いまや感傷の余地なき冷酷な事実である⁽⁶⁸⁾ と述べていた。つまり安倍は、小民族の自決も、小国が大国の動きから超然として存在することについても、非現実的なものと受けとめていたのである。

このような捉え方は、安倍が当時の朝鮮にいかなる姿勢をとって行くかを示唆していたといえよう。

またここから安倍の国際関係観の第五の特徴、大国志向が生まれている。大国志向の結果、安倍は、日本についても、いかにすれば大国的な行動様式がとれるようになるかという課題に大きな関心を払い続けることとなる。それについては、後述することとし、ここでは、安倍が、とりわけ大国としての中国の動向に注目していたことを指摘しておきたい。

安倍は、朝鮮滞在中に何度も中国を訪れ、中国は「さすがに大国である」、朝鮮の王陵など、中国のものに比べれば、全く語るに足りない等々と印象を記していた⁽⁶⁹⁾。そして、日本が最も重視しなければならないのは、中国との関係だと説いていた。1935年には、かつて対中国外交を日本外交の中軸にすべきだとした小村寿太郎を高く評価しながら、広田弘毅外相もまた、身命を賭けて対中国外交を正しい軌道に乗せるべきだと述べていた⁽⁷⁰⁾。また中国人を侮らず、敬し知り理解しようとして、中国人から学ぶべきを学ぶことの重要性を強調していた⁽⁷¹⁾。

このように中国に強い関心を抱いていた背景としては、幼少の頃より漢籍を読んで育ったことを指摘し得る。安倍の父親は、医師だったが、漢学を重んじていた。漢籍で腹と骨を作っておかねばならぬという教育方針を持ち、とくに孟子に高い評価を与えていた⁽⁷²⁾。この父のもとで安倍は少年の頃から孟子を中心に漢籍を強制的に繰り返し読まされていたのである⁽⁷³⁾。

第六に、戦争については1918年に次のように述べていた。まず、人間の心に戦争の源がなくなるのはいつのこととも分らないが、何らかの手段を講じて人間が公然と殺しあうことだけは避けたい。根本的には、人間が自己の心中にある「争気」を断絶する以外に戦争を根絶する道はない。自己の心中に潜む「戦争の酵母」を自覚し、これを懺悔せねばならない。これを根絶しようとする努力は時間がかかるにせよ確かな一歩である——と⁽⁷⁴⁾。

しかし安倍には、孟子の戦争観に共鳴しつつ、相対の敵国が攻め合う戦争は、不正を正すことにはならないので義戦ではない、義戦とは、善が悪を征することで、王者たる上の者が下の者を征することである、戦争は高い立場に立って低い立場のものを制するとき、初めて是認せられるという戦争観もみられた⁽⁷⁵⁾。

この観点から、第一次世界大戦については、次のようにみていた。ドイツが絶対的に不正で連合国が絶対的に正だとも、その正反対だとも考えられない。この戦争の意義は、軍国主義と民主主義の争いであると簡単明瞭にはいえない。それは既成の強国と未成の強国との争いであり、現状維持を便利とするものと現状破壊を便利とするものとの争いである⁽⁷⁶⁾。

他方、日本の満洲国建設については、軍閥を排してその民を救う点において、孟子のいう義戦であると受けとめていた。そしてその言が単に看板に止まらぬためには、どうしても「王道楽土」を実現する義務があると説くに至っていた⁽⁷⁷⁾。

ところでこのような大国志向の国際関係観を持って、とくに朝鮮や中国の民族主義と向き合うとき、安倍にはひとつの不安があった。それは日本が大国になるべきだとする一方、日本文化の性格がそれを可能にするだろうかという懸念から生まれたものであった。次には、安倍が日本文化をどうみていたのかを明らかにしたい。

5. 日本文化の現状把握とそれに由来する不安

安倍によれば、先ず徳川時代の日本の文化は、小規模ではあったがひとつのまとまりを持っていた⁽⁷⁸⁾。それは、東洋のあらゆる文化の中で最も西洋文化から遠いものであった⁽⁷⁹⁾。

一方、中国人の生活様式は、日本人のそれよりも西洋人に近いとみなされていた。安倍

は、中国人が功利主義的、享楽主義的、個人主義的であると観察するとともに、中国が、明治時代になってはじめて本格的に西洋文化を採用した日本よりも、はるかに複雑、大規模かつ長い歴史的関係を西洋との間に持っていたことにも目を向けていた⁽⁸⁰⁾。

朝鮮文化については、内地のものよりも中国的であるとみなし、従って内地の文化よりもいっそう西洋的だと認識していた。とくに服装、住居や獣肉を多く摂取する食生活等に、西洋人への近さをみていた⁽⁸¹⁾。

安倍は、このように日本文化が中国や朝鮮のそれと比較して、西洋文化からより遠かったにもかかわらず、明治期に西洋文化を「思切つて受容れた」ことが、その後の日本文化を「猥雑」にしたと捉えていた⁽⁸²⁾。そしてその様を「西洋植民地的文化の乱雑」⁽⁸³⁾とも表現していた。

しかも安倍によれば、日本がその際精力的に摂取した西洋文化は、西洋のうちでも最も日本人の性質からかけ離れた英米文化であり、それが一層の混乱と異常事態を招くこととなった⁽⁸⁴⁾。安倍は、服装や国民性等からいって、英米は、フランス、ドイツ、ロシアに比べ、日本人の肌合いには最も遠く⁽⁸⁵⁾、英語の語感も、独仏伊語のそれよりも日本人にはなじまない印象があると指摘している⁽⁸⁶⁾。

安倍はイギリス人の功利的精神や沈着な国民性を高く評価し、英国の学問、文化にも敬意をはらっていた⁽⁸⁷⁾。米国に関しても、移り気や浮調子等の欠点は多いとしながらも、「富裕」と「澁刺たる元気」をもとにしたその「実力」には恐るべきものがあると記していた⁽⁸⁸⁾。にも拘らず、安倍は英米文化には、親近感を持つことが出来なかったようである。

さらに安倍は、明治以降の日本人が、西洋に対する確乎たる価値判断基準を持たなかったこと、さまざまな要素を気分によって比較的楽に統一し、安易に調和に至る傾向のあることを問題にしていた⁽⁸⁹⁾。公的生活では主に西洋文化を採用し、私生活では在来の文化がそのまま踏襲され、思想は思想、生活は生活となっている点についても弊害とみていた⁽⁹⁰⁾。対立を意識した緊張感に乏しいことが、日本国民の文化的自覚を弱め、強い感情、徹底的な思想や独創の欠如という欠点を生んでいるのではないかと考えていた⁽⁹¹⁾。

安倍は、そうした混乱と安易な調和のなかで、当時の日本文化や生活様式に依然として根をはっているのは、徳川時代の文化・生活様式であると認識していた。そしてそれは、あまりに国際的要素を欠き、地方的であり特殊に偏り、超民族的・世界的要素に乏しいとみなしていた⁽⁹²⁾。

安倍には、周囲の自然との相互作用によって、国や民族の文化の重要な特質が形づくられるとする観点もあった⁽⁹³⁾。一国民一民族の文化の性質が、彼等の自然に対する態度によって、特徴づけられるとともに、その文化の程度や品位もまた風景に対する態度によって明らかにすることが出来ると考えていたのである⁽⁹⁴⁾。それゆえ彼は、日本人の自然に

に対する態度に強い関心を持っていた⁽⁹⁵⁾。

安倍は、日本人の自然への接し方から、日本文化の特色は箱庭的であるという結論を導き出していた。そして次のような心配をしていた。日本人は、各人が各戸に眺めるべき箱庭を持っており、そのように「小さい額縁」を有するような状態は、西洋にも朝鮮や中国にもほとんどみられない。そこには公園などを作って都市全体の調和を考えるという発想が欠けている。それは日本人が、西洋は勿論のこと、中国や朝鮮と比べても協同的社会生活に不慣れなことを示しているのではないか。安倍は、特に満洲北部でロシア人が経営していた美しい都会や公園が、日本人の手によってこせこせした猥雑なものに変容しつつあるのを目にして、そのようなことが日本人の大陸的發展を妨げるのではないかと懸念していた⁽⁹⁶⁾。

安倍は、個別的なものが力を持つためには、「普遍妥当性」が伴わなければならないとしばしば説いていた。これは彼がカントの哲学から学んだことでもあった⁽⁹⁷⁾。安部によれば、すべて真なるものにおいては、特殊の方面と普遍的方面が離れることなく融合している⁽⁹⁸⁾。それゆえ力強い文化は、求心力とともに遠心力を持つ⁽⁹⁹⁾はずであった。

こう考える安倍は、日本精神を高唱しながら国体の特異性を強調し、日本を世界から孤立した国柄とみなす傾向には一貫して否定的だった⁽¹⁰⁰⁾。同化力によって外国のものを受容するとともに、国外にも拡張して行かねばならない、この双方向性が必要だと説いていた⁽¹⁰¹⁾。そして日本が地方的文化にとどまることなく国際的になるためには、外への進出を難しくしている「徳川時代」を「揚棄せねばならない」と考えていたのである⁽¹⁰²⁾。

そうしなければ中国人の勢いに勝てないのではないかという不安もあった。安倍は、日本人が、中国人よりも明らかに超民族的・世界的要素に乏しいとみていた。そして実際、満洲で日本人が中国人との競争に負けがちだったり、朝鮮に中国人が根を下ろしつつある状況をよく認識していた。個人の力の強い中国人が、生存競争の勝者となるのはほとんど天理の自然であるとも記していた。安倍によれば、そもそも西洋文化から最も遠くに位置する日本人は、西洋人に遅れてしかも西洋人の模倣をしつつ中国に臨んだために、そこで個性ある行動をとることが出来なかった。さりとて、中国人風のやり方で応じたとしても本家本元にかなうはずはない。安倍は、中国人にはない長所をみだし、それを根気強く貫いてゆく道しか日本人には残されていないと説きながら、日本の大陸への發展の難しさを感じ取っていたのである⁽¹⁰³⁾。

しかし、全く希望を失っていた訳ではなかった。日本人の「島国根性」を国際的交渉が少なかったせいでもある⁽¹⁰⁴⁾とみて、今後それが変わり得る可能性に期待していた。

安倍は、日本文化の性格を以上のように観察しながら、西洋により近い生活様式を持つ中国や朝鮮に対して、不安をもって向き合っていたのである。

では安倍の朝鮮観は、同時代にみられた朝鮮に関する議論とはどのような位置関係に

立っていただろうか。また、植民地主義についてはどうみており、「大東亜共栄圏」構想には、いかなる姿勢をとっていただろうか。

6. 朝鮮観と植民地主義への姿勢

先ず安倍は、日本による1910年の韓国併合を肯定的に受けとめていた。それまで朝鮮は「内地」の鼻先に位置するために日本にとって問題そのものであったが、「日韓合邦」は一応この問題を解決したと述べていた⁽¹⁰⁵⁾。また併合は、日本自身のためであったとも認識していた。同時にその日本のエゴイズムは朝鮮の利益を抱擁しえる程度に大きくあってよいとも記していた⁽¹⁰⁶⁾。

しかし併合を正当化するために当時さかんに唱えられていた「日鮮同祖論」に同調していたわけではない。安倍は、併合前は、朝鮮が日本の外国であったと明確に認識していた⁽¹⁰⁷⁾。そして併合が上代から準備されたものであるかのように説く人には与しないと述べていたのである⁽¹⁰⁸⁾。ちなみに安倍は、日本人と台湾人が同じ祖先を持っているという考え方にも否定的だった⁽¹⁰⁹⁾。歴史においては客観性が重要であると説き、歪められた事実が、学問的研究によって正されることを望むと記していた⁽¹¹⁰⁾。

しかしそれは、朝鮮の植民地化の否定ではなかった。安倍は基本的に植民地主義には肯定的だった。人口が多く、土地が狭く仕事が少ないという理由によって、日本の大陸への進出を正当化していた⁽¹¹¹⁾。

また次のように述べて、朝鮮総督府による日本の植民地政策を評価していた。「内地人」と総督政治が朝鮮人に与える刺激は、朝鮮史上最大のものとみななければならない。中国の統治が、朝鮮民衆を刺激した程度は極めて低かった。現在、朝鮮で内地人が活動していることは、朝鮮人が奮起し力を発揮するのに好適な環境をあたえている。言論の自由がない、就職が楽でないという事柄は、朝鮮人の惰眠を覚ます効果を持つはずである。内地人が朝鮮に居住するだけでも朝鮮人に良い影響を与えている。朝鮮文化がこれほど進んだのは、「主として内地人の力による」のである。安倍は、武断政治を行った初代朝鮮総督の寺内正毅についても、「朝鮮の子弟が学問することを喜ばなかった」が、「衷心朝鮮人を愛して居た」と述べて評価していた⁽¹¹²⁾。

このように植民地主義を肯定しつつ、安倍は、過去の歴史にとらわれることなく、環境の変化に相応しい未来を創り出して行くことを重視していた。それはスピノザやカントについて、歴史的発展を十分にとらえていないと批判的だったことや⁽¹¹³⁾、徳富蘇峰が平民主義から帝国主義へ、平和主義、商業主義から軍国主義に移ったことを、平民主義、商業主義の資本主義的発達に伴う変質とみて肯定的に受けとめていたことにも示される⁽¹¹⁴⁾。

安倍は、いたずらに過去の歴史によって現代の行動を基礎づけようとすることは、「新

たに時代を創めようとする意気の乏しさを示す」だけであるとし、「我々の現在および将来が必しも過去の史実に引きずられるものでないといふ信念」を持ちたいと述べていた⁽¹¹⁵⁾。このような観点から「日鮮同祖論」には否定的だったのである。

一方「内鮮融和」には積極的であった。歴史的事実は必ずしも「内鮮融和」に都合のよいもののみを提供しないかも知れないが、それは「枝葉」であって、この事業を遂げるためには、「現在の内地人に融和に対する熾烈なる理想と情熱のあること」が「第一の肝要事」であると述べ、「内鮮融和」を現在及び未来の課題としてとらえなければならないと説いていた⁽¹¹⁶⁾。

このような見方の背景には、民族を固定的にではなく動的に把握する観点があった⁽¹¹⁷⁾。それは、既に指摘したように、安倍が、あらゆる民族の自決を認めようとはしていなかったこととも関連があった。安倍は、民族の統一は血による統一という意味において最も自然な統一であると述べながらも、国民的な国家的統一をより上位に位置づけていた。そして国家の統一は単に自然的な血族的関係のみによっては維持することが出来ないと説いていた。民族という概念は常識的に考えられるほど厳密で明確な概念でもない上に、歴史的文化的関係との具体的融合によってこそ、最も自然にして強固な統一に至ると結論づけていたのである⁽¹¹⁸⁾。これは安倍が結局は、日本と朝鮮の民族的統一を肯定していたことを意味している。実際彼は、日本が併合以来、朝鮮人を同化することによって新たな民族的統一を目指してきたことを「最も正しい方針」であったと明言していた⁽¹¹⁹⁾。

日本と朝鮮が民族的に統一するという場合、安倍にとって重要だったのは、あくまでも内地人が文化の先進者でなければならないということであった。すでに述べたように、安倍は、生活様式において、朝鮮人のほうがより西洋的であるとみていた。また朝鮮人が日本人から学ぼうとするものは、日本的なものではなく西洋的なものだということも認識していた⁽¹²⁰⁾。

しかしこのことを踏まえた上で、西洋の学問と文化を吸収する点において、朝鮮人は、西洋文化輸入の先進者たる内地人には及ばないと述べていた⁽¹²¹⁾。1933年頃には、日本人の西洋文化の摂取の仕方について批判的にみていた⁽¹²²⁾ 安倍だったが、1937年になると、日本人が70年にわたって西洋文化を消化してきた努力は、「公平に考へても相当にすばらしい」⁽¹²³⁾ と賛美するにいたっていた。そして朝鮮文化の将来についても、文化の先進者としての内地人の指導に待つ外なく、またそれが最も好ましいと説いていた。

安倍は、朝鮮が日本文化の力を借りずに自己の文化を造り上げようとするのは、労多くして功少ないことであるとも述べていた。西洋の文化を直接受容するより、日本人による消化を介して摂取する方が、朝鮮人にとっての利益であり幸福でもあるとみていた。そしてそれが将来、内地人と朝鮮人が協力して世界の文化に貢献する端緒を開くものでもあると説いていた⁽¹²⁴⁾。

安倍にとって、内地人は兄であり、朝鮮人はあくまでも弟でなければならなかった。安倍は外地の統治には、二つの方法があるとしていた。ひとつは、英国がインドその他のアジアに対するように、人々を人間扱いにせず、愚かなままにしておいて、純然たる植民地、つまりは「本国の肥やし」にするやり方である。安倍は、朝鮮に対して日本は到底この方法をとることは出来ないとする。そして日本に可能なのは、二つ目の方法、すなわち朝鮮人を日本人の弟とみて、背伸びさせつつ彼等と一緒に仕事するやり方だとしていた。そのためには内地人が兄たる真の資格を常に確保しなければならない、日本人が先ず何よりも頼もしい兄でなければならないと説いていた⁽¹²⁵⁾。また内地人が単に法律上や政治上の権力の優勢をもって朝鮮人に臨むだけでは不足であり、実力つまり「道徳的、知識的、精神的、生理的の力」が、「心ある朝鮮人」の尊敬を十分に勝ち得なければならないと力説していた⁽¹²⁶⁾。

日本人が兄で、朝鮮人が弟でなければならないという発想は、日本人と朝鮮人の結婚についての安倍の考え方も規定していたと考えられる。彼は、1942年に、海軍省主催の非公開の思想懇談会において、「朝鮮人ト日本人トノ結婚」には「慎重ナル考慮ヲ払フベキナリ」と述べて「雑婚」を奨励してはいなかった⁽¹²⁷⁾。

安倍は、このように日本人と朝鮮人をあくまでも差異化しつつ、前者が後者の兄として彼等を導き、「内鮮融和」に向ってゆくべきだとしていた。学問の分野でも、朝鮮学徒が内地の学者に敬意を払わず、西洋の学界に直接進出しようとするということについては警戒していた。朝鮮の学界は科学的研究において先輩である内地の学界の刺激に待たねばならない。単に朝鮮語が読めるということだけを誇りにして、内地人の貴重な研究に敬意を払わないのは、自分の浅薄を語るようなものである。朝鮮に関する研究を欧米の雑誌に送って、その一隅に名前を書きとめてもらうという「けちな功名心」を持たず、朝鮮に対しては世界で最も関心を有する日本の学界に、「国文」によって批評を求めてはどうだろうか——と述べていた⁽¹²⁸⁾。彼はまた、ヨーロッパが何百年かかったことを日本は数十年で行ない、朝鮮はそれを十数年で成し遂げたと、「(朝鮮)半島の一文学者」(括弧内、中見追記)が、自慢するのを快く思っていない⁽¹²⁹⁾。

安倍には、西洋を頂点にその下に日本内地、さらにその下に朝鮮半島を位置づける序列意識が明らかにみられた。それは安倍が、内地人学生には、苦勞して外国語の書物を読んでもらいたいとし、朝鮮人の学生に対しては、卒業後の研究発表を、「国文」で書いて欲しいと説いていたことにも示される⁽¹³⁰⁾。内地人学生に勧めた外国語が西洋の言葉を、「国文」が日本語を指していたことは言うまでもない。

このように一方では内地人が兄として弟を指導すべきだとしながら、安倍は他方、日本人が朝鮮をうまく経営して行くことが出来るかについては、不安も持っていた。彼は、一国が他の一国を併合することの難しさを十分に認識していた。朝鮮の人口2000万余のう

ち、内地人が40万人程度であり、兄として朝鮮人を導いて行くためには、この数では足りないとの印象も記していた⁽¹³¹⁾。また完全な「内鮮融和」は、25年や30年で成し遂げられるものではなく、「百年二百年経つても実現し難い」と捉えていた⁽¹³²⁾。

それゆえ安倍は、日本には、一層巧みな政策が求められるとしていた。朝鮮人の日本化を「固より必要」とみていたが、彼等を自ずとそういう心持にさせることが重要だと考えていた⁽¹³³⁾。そのためにも朝鮮在住の内地人は、地方的で特殊な性格を持つ徳川的もしくは明治初年式日本の生活そのままを朝鮮人に強いてはならないと主張していた。普遍的要素と特殊要素とを識別し、特殊要素を強くないことが重要だと述べ、それが出来なければ、彼等の生活のなかに入り、彼等を同化することは不可能だとも説いていた⁽¹³⁴⁾。

その点からいって、3・1独立運動後に実施された「文化政治」は朝鮮人を扱い易くするものとして好ましいと捉えられた。しかし安倍は、文化政治が同時に彼らを扱いにくくするものでもあるとみて、その難しさについても自覚的であった。それゆえ問題はそれをいかに自然に実行するかであるとし、功を急がず、「民度に応じ」て行なうことが重要だと指摘していた⁽¹³⁵⁾。

例えば、宗教や日々の衣食住に関する事柄については、無理に一律なものにしない方がよいとしていた。また「国語」の普及については、朝鮮人の幸福と進歩を増進するものであるから一層の努力が求められるとしつつも、朝鮮語を抹殺することには反対だった。ある民族の言語を滅ぼすのは、少数民族においてのみ可能であり、2000万人もの朝鮮人の場合には不可能だと判断していたからである⁽¹³⁶⁾。そして「国語」を彼等に学ばせるためにも、内地人が朝鮮語を知る必要がある、彼等の言葉を解することは、やがて彼等を「抱擁」する道であると説いていた⁽¹³⁷⁾。朝鮮の文化や生活に対する理解と同情を欠いて、朝鮮の実情に即さない教育をすることは、避けねばならないと考えていたのである⁽¹³⁸⁾。景福宮の勤政殿を覆い隠すように、総督府を建ててしまったことについても、もう少し工夫が欲しかったと指摘していた⁽¹³⁹⁾。

安倍は、とくに文化政治に基づいた啓蒙が、朝鮮人の「反抗運動」に利用されることを警戒していた⁽¹⁴⁰⁾。彼はかねてより朝鮮人が、「マルキシズムの生齧りに多忙」となって反抗を重ねている状態を批判的にみていた。朝鮮において、「マルキシズムの如き思想」が一時力を持ったのは、朝鮮民族全体を被搾取者として位置づけていたからでもあると解釈していた⁽¹⁴¹⁾。そして朝鮮人学生に対しては、不平があるかも知れないが、その境遇は、考えようによっては決して悪いものではないと述べ、不満を持つよりも「自我と人格とを深める」よう勧めていた⁽¹⁴²⁾。安倍は、優れた頭脳を持つと自負するものが、不平を直ちに社会運動という形で表そうとすることに批判的だった⁽¹⁴³⁾。ここには既に述べたような彼の「個人と社会」観が典型的にあらわれていた。

1941年に安倍は、満洲事変以来、朝鮮人の反抗運動が表面から消え、その富が増し、

高等教育を受ける者も増え、彼等が自分の力を自覚するようになっていくと観察し、これを「総督政治の功績」だと総括していた⁽¹⁴⁴⁾。

このように文化政治に高い評価を与えていた安倍だが、一方彼には、逆らう者に対しては容赦すべきではないという観点もあった。その点で文化政治には限界があるとも認識していた。そして例えば、内地人が「正しい心がけ」で半島人の兄になるつもりであるにも拘わらず、彼等が「よき弟」になろうとしないならば、そのときは「別な処置」をとらねばならない、文化政治は「いたずらに外国の手前を顧念する政治であってはならない」と述べていた。とくに皇室の下に置かれた日本帝国臣民であることを「抗拒」するときには、「一步も仮借すべきでない」とも表現していた⁽¹⁴⁵⁾。

安倍にとって国家が重要なのは、そこに「強い中心」が存在するからであった。それが「多様と個別と自由と対立」を「統一」し、万民に「その所を得せしめる」ことこそ、政治の理想であった⁽¹⁴⁶⁾。すでに述べたように、「人類」や国際社会は、支配の中心を欠いているために、彼にとっては頼りがいのないものであった。安倍は皇室を日本国家の中心とみなし、皇室の威厳の維持を重視していた⁽¹⁴⁷⁾。これは彼が、皇室以外に特色ある日本文化の内実を十分把握することが出来なかった結果でもあったであろう⁽¹⁴⁸⁾。結局安倍は、日本の国民が、皇室を中心に「各々その所を得、尽忠報国を励む」ことを「常道」として説いて行くこととなったのである⁽¹⁴⁹⁾。

しかしここでも彼は、国民の意向に反してただ上から統制することには賛成していなかった。統制が国民の生きがいや誇りをもたらす必要があると説き、一方的に上から押しつけるような全体主義には反対していた。いかなる政治的強制も、その国民の文化的要求を充たすことがなければ、長く持続させることが出来ないと考えていたからである。従って国民が皇室に自ずと親愛の情を寄せることが重要であり、政治家は国民をそのように導いて行く必要があると説いていたのである⁽¹⁵⁰⁾。

このように考えつつ安倍は、それでもなお反抗する朝鮮人に対しては、「別の処置」をとるべきだと主張していたのである。文化政治がうまく機能しない極限状態においては、武力による弾圧も辞さないとしていたのではないだろうか。それは安倍が、日本の大陸への軍事的侵略に基本的に肯定的だったことから推測可能である。

安倍は、満洲事変の前から日本の満洲進出に肯定的だった。先に述べたように満洲事変以降の軍事侵略についても、「義戦」とみなして正当化していた。日本の力によって維持された満洲の平和が、日本人よりも中国人により多くの利益を与えたと述べ、日本人は、中国に多大なる奉仕をしたという結論を引き出していた⁽¹⁵¹⁾。このように侵略を正当化した上で安倍が心配していたのは、日本が満洲国に対して、「細かな島国的な世話を焼き過ぎて、この新しい国から嫌はれ」ないだろうかということであった⁽¹⁵²⁾。それ以後も安倍は、日本が大陸から離れ外国から孤立していた時代の習慣を脱け出せないのではないかと

懸念し続けて行く⁽¹⁵³⁾。

安倍は、日本が中国本土を侵略する頃には、かつての中国民衆への高い評価を失っていた。1937年に出版された『孟子・荀子』のなかで中国の民衆について、社会的、国家的自覚がきわめて希薄であり、自然なプリミティヴな民衆であると述べていた⁽¹⁵⁴⁾。こうして日本による中国侵略もまた上に立つ者が下の者を征するための「義戦」として受けとめられていったのだと思われる。

そして安倍は、大東亜共栄圏構想についても明らかに支持する姿勢を持っていた。1942年には「思想懇談会」での講演において、朝鮮での経験を引きあいに出しながら大東亜共栄圏でのあるべき教育について、次のように説いていた。以下はその要約である⁽¹⁵⁵⁾。

大東亜共栄圏内の住民に対して、英米のように自国の利益のみを図って搾取することは避けなければならないが、甘い人道主義によって彼等を甘やかすことは不必要である。日本が大東亜共栄圏の指導者なのだから、彼等を日本の長期的利益のために奉仕するよう導かねばならないのは明白である。彼等を幸福にすべきではあるが、幸福とは単なる呑気な状態を言うのではなく、彼等を適当な労働に従事させ、日本に貢献するよう導く必要がある。八紘一宇とは皇室の慈悲に浴せしめ、日本精神を吹き込み、日本人を理想とする教育をすることだが、その理想が実現するのは遠い将来のことだろう。先ず彼等に日本語を教育するとともに、日本人は共栄圏内の言語に通じるべきである。風俗習慣について、性急な押しつけをすることは相手の反感を招くので、住民の自発的で自然な発展を待つことが肝要である。日本文化には地方性が強いので、この姿勢はきわめて重要である。教育については特別の者以外に高等教育を施す必要はない。朝鮮では大学教育を行ったが、卒業した者にそれに見合った社会的地位を与えねばならなくなって難しい問題が生まれ、高等文官試験に朝鮮人が多く合格していることも社会的に支障を来している。大東亜共栄圏内の「土人」は朝鮮人よりも文化程度が低いので、国民学校程度の教育で良い。彼等に直ちに「国体」を説くのも無益である。先ず彼等に接する日本人の具体的行為を通じて、日本の国体を有難いと思わせるべきである。米国が映画を通じてフィリピン人に米国への憧憬を持たせるに至ったように、映画を使うことも重要である。人道的であろうとして住民から蔑視される場合があり、圧迫することでかえって尊敬される場合もある。日本は朝鮮人に親切かつ正々堂々とした統治を行ってきたが、そこには困難も生まれている。そのことを我々は十分自覚して大東亜を統治すべきである。

おわりに

筆者は、この課題に取り組むに際して、当初、安倍は日本の朝鮮政策に批判的な観点を持っていたが、行動的でなかったために、批判を控えていた、もっと行動的であれば日本の朝鮮政策を批判しえたのではないかと想定していた。しかし安倍の戦前の著作のほとんどに目を通し考察した結果、全くそうではなかったことに気づかされた。というよりもあからさまに日本の植民地主義やアジアへの侵略を肯定していたことに驚きを禁じえなかった。

かりに安倍がもっと行動的だったとしても、その基本的発想から判断して、彼が日本の朝鮮への政策を批判する側に立つということはありえなかったであろう。むしろ露骨に政府寄りの行動をとらなかった理由として、次の二点を指摘し得るのではないか。

第一には、朝鮮のなかにおいて、問題の難しさを具体的に認識し、植民地政策を成功させるためには、より巧みに深く静かに人心をつかむ必要があると考えていたことである。京城帝大には、内地学生と「半島学生」が共学していたこともあってさまざまな困難があり⁽¹⁵⁶⁾、安倍は、朝鮮支配の難しさをそこから具体的に感じとることが出来たのであった。

第二には、安倍が、出来るだけ政治に関係することを避けるのを生活方針としていたことである⁽¹⁵⁷⁾。彼は、「本来社会的関心の持ち主」であるが、「已むに已まれぬ大和魂」の強い動きが十分ないので「疲れることなく闘争を続け」ることが自分には出来ない⁽¹⁵⁸⁾と述べていた。時々朝鮮政治に関する議論をしたくなるが、そのためには正確な知識やその議論に対する責任・迷惑を受ける覚悟、それを利用・悪用される面倒を無視しえるだけの情熱を要すると考え、多くの場合は止めてしまったとも記していた⁽¹⁵⁹⁾。そこにはケーベルの人生態度に学んだものもあった。既に述べたが、安倍によれば、ケーベルは、自己にとって本質的なことを守って、それ以外は捨て、自分の個性に適するもののみに関わるよう仕事を限定するよう勧めていた⁽¹⁶⁰⁾。したがって社会に対しては受動的だった。従来、安倍のこの姿勢は、彼が日本の政策に批判的だったにもかかわらず批判を控えていた理由だとみなされてきた。しかしここではその姿勢ゆえに、安倍が、植民地政策とは距離がある人物であるかのように誤解されてきたのではないかということを強調しておきたい。

以上考察したように、安倍のとった姿勢は、ひとつには植民地支配をより巧みに行うための方法を、さらにはその生活指針が植民地政策への積極的加担を控えさせていたことを反映するものであった。これまでの安倍への高い評価は、これらの側面を好意的に受けとめ過大に評価した結果だったのである。

註

- (1) 主な研究としては以下のものがある。芳賀徹「戦前昭和の日本文人と韓国—安倍能成の場合」（在日本韓国文化院編『日韓文化論』学生社、1994年）。梁永厚「朝鮮時代の安倍能成」（『季刊青丘』第9号、1991年）。高柳俊男「安倍能成：滞在15年の学者が見た朝鮮本来の美しさ」（館野哲編著『韓国・朝鮮と向き合った36人の日本人—西郷隆盛、福沢諭吉から現代まで』明石書店、2002年）。梶井陟「安倍能成における朝鮮—朝鮮語を考える（最終回）」（『季刊三千里』19号、1979年秋）。榛葉梨花「安倍能成の朝鮮観」（『季刊三千里』50号、1987年夏）。崔在喆「近代日本人の朝鮮観の系譜—安倍能成の場合（他）」（『アジア太平洋研究』No. 27、2004年）。五十嵐顕「在日朝鮮人の教育問題と戦後日本の教育反省について」（『国民教育研究』35号、1966年）。高崎宗司『朝鮮の土となった日本人—浅川巧の生涯』草風館、1982年（同、増補新版、1998年）。
- (2) この観点の必要性については、高柳、前掲論文、97頁でも指摘されている。
- (3) この年に新設された京城帝大予科講師の身分での留学であった。安倍『我が生ひ立ち』岩波書店、1966年、547頁。
- (4) 以上、安倍『静夜集』岩波書店、1934年、359頁。同『自然・人間・書物』岩波書店、1942年、126頁。
- (5) 安倍『草野集』岩波書店、1936年、165頁。
- (6) 内地人とともに朝鮮人の学生を教えていたにもかかわらず、言及がみられない。ただし戦後の1960年から65年にかけて書かれた前掲『我が生ひ立ち』、555頁では、尹泰東、朴致祐、高亨坤、申南徹の名前をあげている。なお京城帝大における朝鮮人学生の位置については、京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編『紺碧遙かに』京城帝国大学同窓会、1974年、391～429頁を参照。
- (7) 安倍『朝暮抄』岩波書店、1938年、409～411、415頁。
- (8) 安倍『有難い贈物』1945年（『安倍能成選集』第1巻、日本図書センター、1997年、217頁）。安倍によれば、工芸会とは浅川伯教を中心とした工芸の同好会だが、その説明のなかにも朝鮮人の名前は出てこない（同上書、215～216頁）。
- (9) 例えば、前掲『静夜集』、125、143～144頁。
- (10) 安倍は、20代の頃から自然に親しんでいた。例えば1905年に野尻湖でひと夏を過ごした際に書かれた文章に、すでに多くの自然描写が含まれていた。安部『野尻湖日記』1905年（安倍『予の世界』東亜堂書房、1913年、19～130頁）参照。
- (11) 前掲『草野集』、357～358頁。安倍『青丘雑記』岩波書店、1932年、40、48、74～81、141頁。
- (12) 前掲『自然・人間・書物』、16～17頁。これは、柳宗悦が光化門を擁護したのと似た発言だが、安倍には、柳にみられたような朝鮮の人々への敬愛の念は感じられない。安倍の場合には、むしろ日本が植民地経営をうまくすすめるためという観点が強かった。
- (13) 前掲『静夜集』67頁、前掲『草野集』212頁。
- (14) 前掲『青丘雑記』94頁、同上『静夜集』108頁。
- (15) 前掲『自然・人間・書物』112頁。
- (16) 前掲『静夜集』126、141頁。
- (17) 前掲『青丘雑記』「序」2頁。
- (18) 前掲『自然・人間・書物』13、205頁。前掲『草野集』60頁。
- (19) 前掲『青丘雑記』「序」4頁、34頁。
- (20) 例えば、前掲『予の世界』387～390頁。
- (21) 安倍「夏目先生の追憶」1917年、安倍「人間としてのケーベル先生」1923年（いずれも『安倍能成選集』第3巻所収）39、54～55頁。
- (22) 前掲『予の世界』385頁。前掲『静夜集』216頁。
- (23) 安倍『明治思想界の潮流—文芸評論を中心として』（岩波講座日本文学）、岩波書店、1932年、14、46頁。

- (24) 前掲『青丘雑記』279頁。
- (25) なお安倍は、のちに藤村の妹を妻に娶っている。自殺した藤村の死を悲しんで書かれた文章に、「我が友を憶ふ」1904年（前掲『予の世界』所収）がある。
- (26) 以上、スピノザについては、前掲『草野集』22、30～31頁。
- (27) 以上、ケーベルについては、前掲『静夜集』216、225～224頁。前掲「人間としてのケーベル先生」58、62頁。
- (28) 同上「人間としてのケーベル先生」58頁。
- (29) 前掲『草野集』17頁。
- (30) 前掲『青丘雑記』103～104頁。安倍『青年と教養』岩波書店、1940年、375頁。
- (31) 前掲『予の世界』386頁。
- (32) 同上書、387頁。
- (33) 前掲『草野集』34～35頁。
- (34) 前掲『静夜集』388頁。
- (35) 安倍「震災と都会文化」1923年（安倍『思想と文化』高陽社、1924年、所収）、670頁。
- (36) 同上『思想と文化』388頁。安倍『時代と文化』岩波書店、1941年、104頁。
- (37) 前掲「人間としてのケーベル先生」58～59頁。
- (38) 前掲『自然・人間・書物』167頁。前掲『我が生ひ立ち』iii頁。
- (39) 安倍「山中雑記」1918年（前掲『安倍能成選集』第1巻）、30頁。
- (40) 前掲『朝暮抄』39頁。
- (41) 前掲『思想と文化』440頁。
- (42) 前掲「山中雑記」30頁。前掲『青丘雑記』53頁。同時に、民衆への不信感もないわけではなかった。関東大震災に際して、民衆の多数は浮説によって妄動しかねない人間であると述べていた（前掲『思想と文化』665頁）。民衆による言論圧迫を官憲のそれよりも批判的にみる見方もあった（前掲『静夜集』389頁）。
- (43) 同上『思想と文化』431頁。
- (44) 例えば、前掲『青丘雑記』87、354頁。前掲『静夜集』11頁。
- (45) 同上『青丘雑記』87頁。
- (46) 同上書、345～348頁。
- (47) 同上書、354頁。
- (48) 以上、中国の民衆については、同上書、54～55、64～65、73頁。
- (49) 前掲『静夜集』4、11、14、19頁。
- (50) 同上書、146～147頁。前掲『青丘雑記』91頁。
- (51) なお個人のあり方について、日本と中国では中国の方を上にも見ていた可能性が高い。安倍は、日本では個人の尊重、個人の自由の思想が弱いと指摘し（安倍『カントの実践哲学』岩波書店、1924年、87頁。前掲『明治思想界の潮流』12頁）、個人主義とそれに基いた社会的訓練において、中国人に学ぶ点がある（前掲『青丘雑記』70～71頁）と述べていたからである。
- (52) 前掲『時代と文化』290頁。前掲『思想と文化』338頁。
- (53) 以上、同上『思想と文化』同上頁。
- (54) 前掲『時代と文化』17頁。
- (55) 前掲『自然・人間・書物』371頁。
- (56) 安倍「『ベルツの日記』を読む」1939年（『安倍能成選集』第3巻）、224頁。
- (57) 前掲『時代と文化』111頁。
- (58) 同上書、47頁。
- (59) 前掲『思想と文化』396頁。
- (60) 前掲『時代と文化』124頁。
- (61) 前掲『思想と文化』389頁。
- (62) 安倍『巷塵抄』小山書店、1943年、80～81頁。

- (63) 前掲『時代と文化』31頁。
- (64) 前掲『巷塵抄』29頁。
- (65) 前掲『朝暮抄』326頁。
- (66) 前掲『巷塵抄』31～32頁。
- (67) 前掲『自然・人間・書物』73頁。
- (68) 同上書、67、106、370頁。
- (69) 前掲『青丘雜記』185頁。前掲『静夜集』135頁。
- (70) 前掲『草野集』455頁。
- (71) 前掲『青丘雜記』237頁。
- (72) 前掲『草野集』268頁。
- (73) 前掲『静夜集』279頁。安倍『孟子・荀子』岩波書店、1937年、序4頁。なお安倍自身は、成長してからは孟子にそれほど惹かれなかったと述べている（前掲『草野集』268頁）が、それでもさまざまな文章のなかで孟子への言及がみられる。
- (74) 前掲『山中雜記』29頁。このような戦争根絶の発想は、安倍が、戦前から、戦後の平和活動につながるような考えを持っていたことを示している。
- (75) 前掲『孟子・荀子』123～124頁。
- (76) 以上については、前掲『思想と文化』381～382、390頁。
- (77) 前掲『孟子・荀子』124頁。
- (78) 前掲『静夜集』364頁。
- (79) 安倍「洋服と建築」（『安倍能成選集』第1巻）191頁。ただし日本文化のどの点がどう西洋文化とかけ離れているかについて、安倍は語っていない。
- (80) 前掲『自然・人間・書物』302頁。前掲『青丘雜記』274～275頁。
- (81) 同上『青丘雜記』、328～329頁。
- (82) 同上書、330頁。前掲『静夜集』364頁。
- (83) 前掲『朝暮抄』310頁。
- (84) 前掲「洋服と建築」191頁。前掲『青丘雜記』330頁。
- (85) 具体的にどのようなことを指しているのかは明らかでない。日本人をドイツのとみる見方が、第一次世界大戦時に英国人のなかにはみられた（See, Nakami Mari, “J. W. Robertson Scott and His Japanese Friends”, in Ian Nish ed., *Britain and Japan*, vol. II, Japan Library, UK, 1997, p.173）が、あるいはそれと同じような意味だったのだろうか。
- (86) 前掲「洋服と建築」190～191頁。ちなみに安倍は一高では英語組だった（前掲『草野集』186頁）。しかしその後はドイツ思想に関心を寄せたこともあって、京城帝大の自分の研究室の書物は、多くがドイツ語だった（英語もかなりある）と述べていた（同上書、277頁）。
- (87) 前掲『思想と文化』401頁。前掲『自然・人間・書物』329頁。
- (88) 同上『自然・人間・書物』329～330頁。
- (89) 前掲『静夜集』370。安倍「能楽の芸術的価値」1920年（『安倍能成選集』第3巻）244～245頁。前掲『思想と文化』320頁。
- (90) 前掲『青年と教養』389頁。同上『思想と文化』248頁。
- (91) 前掲「能楽の芸術的価値」244～245頁。同上『思想と文化』614頁。
- (92) 以上については、前掲『青丘雜記』41、327、329、338頁。
- (93) 前掲『朝暮抄』299頁、301頁。
- (94) 前掲『草野集』214頁。
- (95) 前掲『朝暮抄』301頁。
- (96) 以上については、次を参照。前掲『静夜集』367～368頁。前掲『青丘雜記』334頁。前掲『朝暮抄』306頁。
- (97) 前掲『カントの実践哲学』38～39、55頁。
- (98) 前掲「能楽の芸術的価値」232～233頁。

- (99) 前掲『自然・人間・書物』316頁。
(100) 前掲『孟子・荀子』165頁。
(101) 前掲『思想と文化』236～240、297～298頁。
(102) 前掲『青丘雜記』338頁。
(103) 以上、日本人と中国人に関しては、同上書、41、66、189、235～238頁。
(104) 前掲『草野集』394頁。
(105) 同上書、112頁。
(106) 同上書、116頁。
(107) 前掲『青丘雜記』76頁。
(108) 前掲『草野集』127頁。
(109) 前掲『静夜集』26～27頁。
(110) 同上『静夜集』377頁。前掲『草野集』127～128頁。
(111) 前掲『自然・人間・書物』344頁。
(112) 前掲『草野集』116頁、121～123頁。前掲『朝暮抄』356頁。
(113) 安倍『スピノザ倫理学』岩波書店、1935年、19頁。前掲『時代と文化』12頁。
(114) 同上『時代と文化』158頁。
(115) 前掲『草野集』127～128頁。
(116) 前掲『静夜集』380～381頁。前掲『朝暮抄』352～353頁。
(117) 前掲『草野集』141頁。
(118) 前掲『巷塵抄』9～10頁。
(119) 同上書、13頁。
(120) 前掲『青丘雜記』337～338頁。
(121) 同上書、338頁。
(122) 例えば、前掲『静夜集』364、370頁。
(123) 前掲『朝暮抄』355～356頁。
(124) 同上書、380頁。
(125) 以上については、前掲『草野集』116～117、119頁。前掲『巷塵抄』92頁。
(126) 前掲『朝暮抄』449～450頁。
(127) 大久保達正他編著・土井章監修『昭和社会経済史料集成』第16巻（海軍省資料16）、大東文化大東洋研究所、1991年、269頁。小熊英二『単一民族神話の起源—（日本人）の自画像の系譜』新曜社、1995年、330頁も参照。
(128) 前掲『朝暮抄』382頁。
(129) 前掲『青年と教養』195頁。
(130) 前掲『朝暮抄』423頁。
(131) 前掲『草野集』115、121頁。
(132) 前掲『朝暮抄』449頁。
(133) 前掲『青年と教養』210頁。
(134) 前掲『青丘雜記』327、338～339頁。
(135) 前掲『草野集』117、119頁。
(136) 以上、前掲『草野集』121、126頁。
(137) 前掲『自然・人間・書物』330頁。
(138) 前掲『草野集』129頁。
(139) 前掲『青丘雜記』47頁。
(140) 前掲『草野集』129頁。
(141) 以上、同上『草野集』、124頁。前掲『青丘雜記』315頁。
(142) 前掲『自然・人間・書物』185～186頁。前掲『青年と教養』195頁。
(143) 同上『青年と教養』196頁。

- (144) 前掲『巷塵抄』91～92頁。
- (145) 以上、前掲『草野集』117、121頁。
- (146) 前掲『時代と文化』123頁。
- (147) 前掲『巷塵抄』50頁。
- (148) 安倍は、俳句、和歌、能楽を日本的な特色を持つものとみていたが（前掲『草野集』162頁、前掲『朝暮抄』259頁、前掲『思想と文化』621頁等）、学問的研究を踏まえることなく日本文化の事實的・客觀的認識は出来ないと1934年の段階で述べており、日本文化の内実を十分に把握していないことを示唆していた（同上『朝暮抄』299～300頁）。
- (149) 前掲『巷塵抄』111頁。
- (150) 以上、同上書、21、50頁。前掲『時代と文化』18、60頁。
- (151) 前掲『青丘雜記』237頁。
- (152) 同上書、339頁。
- (153) 前掲『巷塵抄』87頁。
- (154) 前掲『孟子・荀子』137頁。
- (155) 「安倍能成氏講演 大東亜共榮圈ニ於ケル教育ニ就テ」（前掲『昭和社會經濟史料集成』第16卷）、264～269頁。
- (156) 安倍は、前掲『自然・人間・書物』184頁でそう指摘している。
- (157) 前掲『草野集』114頁。
- (158) 安倍「隨筆を書く心持」1937年（『安倍能成選集』第1卷）13、16～17頁。
- (159) 前掲『草野集』114頁。
- (160) 前掲「人間としてのケーベル先生」54～55頁。

※ 文献探索に際し、清泉女子大学図書館の高木直子さんに御尽力いただきました。深く御礼申し上げます。